

言葉の選択に見る男女の肌の心的イメージ

Differences on Mental Imagery of Skin Color between Genders: Patterns of Word Choice in Expression of the Shade

山田雅子 Masako YAMADA

埼玉女子短期大学

Saitama Women's Junior College

Keywords: 肌, イメージ, 性差, ジェンダー.

1. はじめに

実際の肌の色には性差がある. この事実は種々の実測研究によっても示されている^[1,2]. だが, 色票選択により若年の日本人に抱かれる男女の肌の心的イメージ(心の中に抱く像)を捉えた研究では, 明度・彩度の方向こそ現実と一致するものの, 色相については男性の方が女性よりも黄み寄り, 女性の方が男性よりも赤み寄りとなる傾向が見られ, 実際の性差とは真逆となることが報告された^[3]. 本研究においては言葉の面から男女の肌の心的イメージを探り, 両者の比較を図った.

2. 方法

2.1 対象者

関東在住の日本人女子短期大学生 82 名
(平均年齢 18.96 歳、標準偏差 0.90)

2.2 調査項目

以下の 6 種の肌について, 自分の考えに最も近い明るさと色みを選択肢の中から回答させた.

- (1) (2) 自分自身の現在/理想の肌の色
- (3) (4) 平均的な男性/女性の肌の色
- (5) (6) 理想的な男性/女性の肌の色

尚, 明るさの選択肢は「非常に色黒/色黒/やや色黒/中庸/やや色白/色白/非常に色白」, 色みの選択肢は「非常に赤み/赤み/やや赤み/中庸/やや黄み/黄み/非常に黄み」とした (各 7 段階).

3 結果および考察

3.1 全体の傾向

各肌について選択された度数を集計した結果, 次の Figure 1-1 および 1-2 が得られた. 明るさについては, いずれの項目についても色黒や色白等, 方向性が比較的明瞭に捉えられたが, 一方の色みについては, 調査対象の肌の設定を問わず過半数が「中庸」を選択したことが特徴と言える.

自身の肌の色について, 現在の心的イメージと理想との間で χ^2 検定を行ったところ, 明るさ, 色み共

に, その選択の偏りは 0.1% 水準で有意であった. 当該偏りは, 現在の肌の心的イメージに比して理想の方が色白で赤み寄りであったことを示す.

また, 先の集計結果に基づきコレスポンデンス分析を行った結果, 5 軸が抽出された. 第 1 軸を縦軸, 第 2 軸を横軸に配し, 各要素のスコアを Figure 2 として図示した. 尚, 第 1 軸と第 2 軸の累積寄与率は 84.6% である.

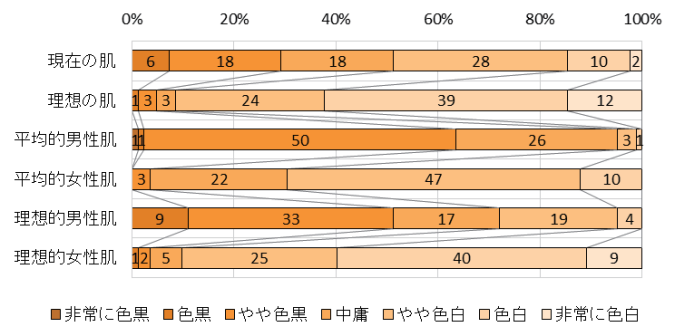


Figure 1-1 各設定に対する肌の明るさの選択結果

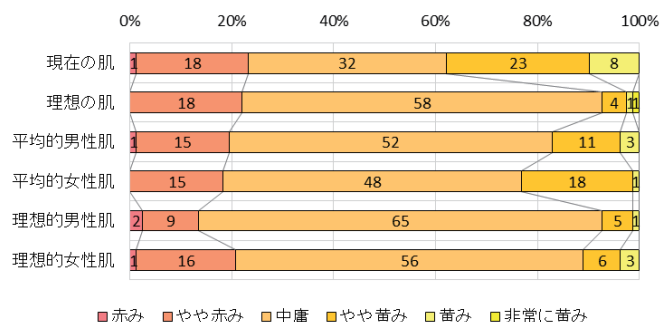


Figure 1-2 各設定に対する肌の色みの選択結果

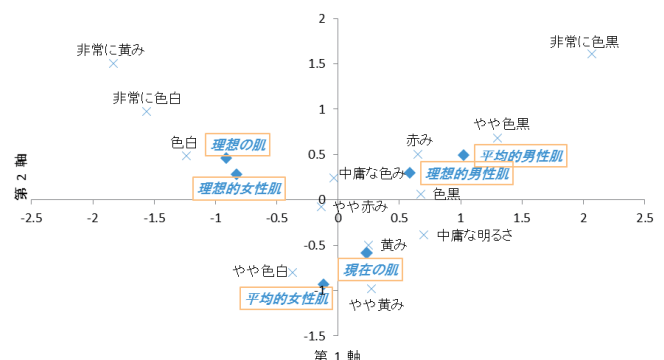


Figure 2 コレスポンデンス分析による各要素の布置

自身の理想の肌と理想的な女性の肌は同じ象限にあり、自他の区別なく似通った心的イメージが抱かれていることが窺われる。また、男性の肌の平均と理想は非常に近く、異性である男性に対して心的イメージの細分化は進んでいないことが推測される。

3.2 男女の心的イメージの比較

男女の肌の心的イメージに注目し、平均的な男性の肌と女性の肌、理想的な男性の肌と女性の肌との間で χ^2 検定を行った結果、明るさについては、いずれの組み合わせについても有意な偏りが見られ（全て0.1%水準）、男性に対して女性よりも色黒寄りとの心的イメージが抱かれていることが判明した。当該結果は、色票が用いられた先行研究^[4]の結果および実際の性差^[1,2]と同様の傾向である。しかしながら、他方の色みにおいては、平均的、理想的共、有意な偏りは認められず、先行研究のように男性が黄み寄りで女性が赤み寄りといった明瞭な傾向は捉えられなかった。この結果を受け、対象の違い（男性か女性か）と肌の心的イメージの変化に着目し、該当するデータを抽出した上でマクネマー検定を行った。抽出結果はTable 1に示す通りである。尚、本集計にあたっては、「非常に色黒」から「やや色黒」までを色黒寄りの選択として解釈し、他の色白、赤み、黄みについても同様にまとめ、集計し直した。

Table 1 対象（男女）の変化と肌の心的イメージの変化

	平均肌	理想肌
男性＝色黒寄り／女性＝色白寄り	40	36
男性＝色白寄り／女性＝色黒寄り	0	0
男性＝赤み寄り／女性＝黄み寄り	5	3
男性＝黄み寄り／女性＝赤み寄り	4	2

肌の色の明るさの偏りについては、平均的、理想的を問わず0.1%水準で有意であり、男性には色黒、女性には色白の心的イメージが持たれていることが改めて明瞭になった。しかし色みについては、いずれも有意ではなく、明るさのようなはっきりした方向性は持たれていないという結果を再確認した。言語ラベルによる概念固定の効果を考えれば、色票選択よりも言葉のカテゴリ選択の方が、より厳密さを求められると想像される。本研究の結果から推測される限りでは、男女の肌の色みについては言語化して意識されることが少なく、色黒・色白といった明るさ程には絶対的な方向性を持たないと考えられる。

3.3 自己の肌の色に対する認識による分析

自己の肌に対する認識によって、自身の肌の記憶色や一般的に好ましい肌の色の認識に違いがあるとの研究結果がある^[4]。男女の心的イメージの持ち方の規則性を更に探るため、自己の肌に対する認識によって対象者を群分けし、群間比較を行った。第一

に、自己の肌の色に対して色黒寄りとの認識を持つ群（24名／以降、色黒群）と色白寄りとの認識を持つ群（40名／以降、色白群）、第二に、自己の肌に対して赤み寄りとの認識を持つ群（19名／以降、赤み群）と黄み寄りとの認識を持つ群（31名／以降、黄み群）とで傾向を比べた。各群が持つ方向性について特に確認するため、本分析では、「中庸」を境に、「色黒寄り（非常に色黒～やや色黒）」、「色白寄り（非常に色白～やや色白）」もしくは「赤み寄り（非常に赤み～やや赤み）」、「黄み寄り（非常に黄み～やや黄み）」の3カテゴリに集計し直し、得られた度数に対して χ^2 検定を行った（2群×3カテゴリ）。各偏りの分析結果はTable 2の通りである。

現在の自身の肌を色黒寄りと捉える色黒群は、平均的な女性の肌の色を色白寄りに回答する傾向が捉えられた（5%水準）。色黒群は、女性全般に比べて自分自身は肌の色が黒いとの認識が強いことが窺われる。また同群では、理想的な女性の肌の色みとして赤み寄りを選択する傾向が比較的強く、色白群による同選択が「中庸」に集中することとは異なる傾向が見られた（5%水準）。更に、自身の肌の色を黄み寄りと捉える黄み群は、理想的な男性の肌の色として色黒寄りの肌を選択する一方、赤み群では、色白寄りにも選択が広がる傾向にあることが分かった（10%水準）。また、平均的な女性の肌の色みとして、黄み群はより黄み寄りを選択する傾向が捉えられた（10%水準）。本調査の対象者は全て女性であるため、平均的な女性の肌の代表として自分自身の肌の色を据えていることも推測される。

本研究では、男女の肌の色みに関して色票を用いた先行研究の結果をそのまま再確認することはできなかったが、自己の肌が一つの基準となり、相対的に同性や異性の他者の肌が捉えられている可能性が示唆された。色票と言語的カテゴリとの間の直接的な比較も今後取り組んでいくべき課題と言える。

Table 2 各群における χ^2 検定結果

		平均肌		理想肌	
		男性	女性	男性	女性
色黒群・色白群間比較	明るさ	n.s.	*	n.s.	n.s.
	色み	n.s.	n.s.	n.s.	*
赤み群・黄み群間比較	明るさ	n.s.	n.s.	†	n.s.
	色み	n.s.	†	n.s.	n.s.

※ † p<.10, *p<.05

引用文献

- [1] 山田雅子：膚色における性差—自己の肌の概念色と実際の色—。埼玉女子短期大学研究紀要, 19 (2008) 249-261.
- [2] 道江砂江子ら：日本人男女における加齢に伴う皮膚色の変化。実践女子大学生活科学部紀要, 37 (2000) 101-105.
- [3] 山田雅子：肌色の記憶色における特徴抽出。埼玉女子短期大学研究紀要, 22 (2010) 41-53.
- [4] 鈴木恒男：好ましい肌色を規定する要因の解析—記憶構造からのアプローチ。日本色彩学会誌, 21(1) (1997) 25-33.